

田原親宏・親貫の反乱

——田原氏と豊後清原一族との繋がりにおいて——

甲斐素純

はじめに

(一五七九) これは天正七年の暮から八年にかけておこった豊後の内乱の一つである。この反乱で滅亡した田原氏の重臣の一人として活躍していたのが、豊後清原一族で早くから田原氏に仕えていた、国東地方在住の森氏であった。この森氏がいつ頃田原氏に仕え、行動を共にするようになったのかは判明しないが、延文五年の足利義詮御判御教書案(一三六〇)によると、足利義詮は「玖珠郡山田・帆足・古後并飯田郷内森・岩室・戸幡菖蒲迫・松行名等」を田原氏能に沙汰するよう大友氏時に命じている。また康暦元年の足利義満御判下文によると、「球珠郡内山田郷(二)原田次郎・帆足郷・古後郷(三)志津利孫三郎・飯田郷」などを父下野守氏能の讓状によって領掌するよにとの御判下文が、子息徳一丸(親直)に与えられている。この頃国東の田原氏が、玖珠の地をも合戦の勲功として手に入れていたことが分かる。この氏能の時代が、田原氏の全盛時代である。この田原氏は、大友宗家に対し大友志賀・大友詫磨氏と共に、大友庶流中の御三家とも言うべき家柄で、大友庶氏の中でもずば抜けた実力を有し、南北朝や戦国時代には本家大友氏と対立するまでの強大な勢力となっていた。

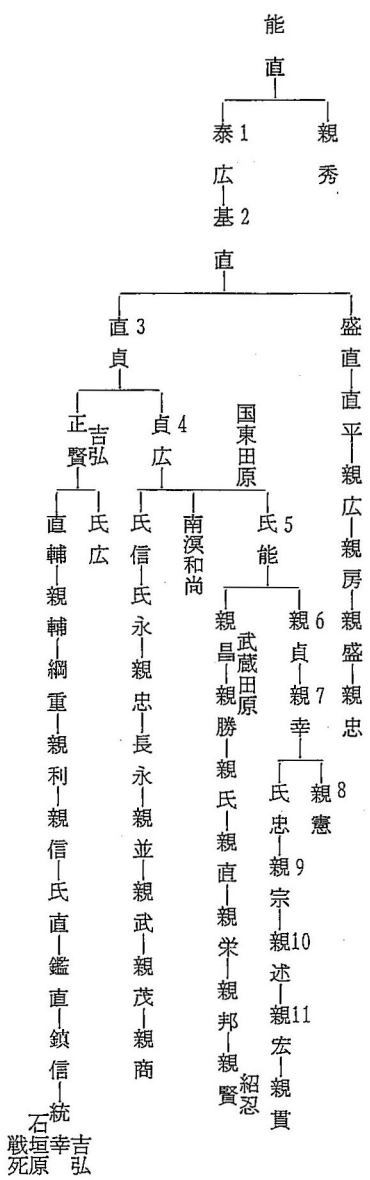
この田原氏の初代田原泰広は、大友初代能直の十二男で母は京の白拍手であった。このため、延応二年の能直妻深妙尼の諸

子への所領配分にも所領の分配はなく、持ちまへの行動力で国東の田原郷を手に入れた。田原氏はこの田原別符が苗字発生の地であり、以来この地名を名乗るのである。正式な財産配分を受けなかった泰広は、子の基直と共に蒙古合戦で活躍し、その軍功に依って所領を増やし、以降合戦の度ごとに新恩に依る所領・所職を増大していった。

泰広の子孫は、武将としての軍事的能力と時勢に対する見識が優れていた者を多く輩出し、南北朝動乱期には思う存分活躍し、大友氏を凌ぐまでになっていた。九州北軍の中心として活躍した氏能の代には、一時所領は豊前・豊後・筑前・筑後・肥後・周防六ヶ国にまたがって二十数ヶ所もあった。田原氏の実力は足利將軍家も十分認めており、国東郷に足利義満の命にかかる安国寺が建立されたのも、この時代であった。これは、田原氏との関係を抜きにしては考えられない。本来豊後国では、大友氏の本拠府中に建てられるべきものであるが、田原氏の本拠国東郷に建てられたことは、田原氏の力が大友氏に匹敵するまでになっていたことを現わしている。

田原氏系図 (「入江文書」による)

沓掛田原



(『大分の歴史』(3)142頁より)

このような田原氏の全盛時代に、玖珠にいた豊後清原一族の森氏の一部が、田原氏と行動を共にしたのではなからうか。玖珠の地ではそうさしたる進展もなく、望みも少ない様な人々が、新天地を求めて田原氏についたのではなかったか。所領の大小はあるにしても、始めは協力者として横の關係にあつた両者が、次第に主従關係に移行していったと思われる。⁽⁵⁾ 筆者の管見の範圍では、田原氏關係の文書中で森姓が初めて出てくるのは、^(一三七四) 応安七年の豊前城井陣合戦手負注文案である。これは田原氏能が高畑城に拳兵した宇都宮氏を攻めた時の豊前城井合戦に際し、負傷した家臣の人名と箇所を注進した文書である。その中に「八月十三日森四郎ヒサ」とある。この森四郎なる人物が、後々で田原氏の老中などとして出てくる森氏と結びつくかどうかは速断できないが、一応記しておきたい。もしこれが豊後清原一族の森氏であるとすれば、氏能の時代から森氏が田原家に被官として仕えており、数年前新発見された森文書に出⁽⁷⁾てくる人々の先祖であるかも知れない。いずれにしても、森氏は戦国期田原氏の重臣の一人として活躍している。

二

大友氏が全盛を極めていた当時、九州統一の志をいだいていたであろう大友宗麟は、自分と親戚關係にある伊東氏旧領を島津氏が占領したのをみて、配下の大軍を動員して天正六年十月二十日、^(一五七八) 島津方の武將である山田有信らが守る新納院の高城(宮崎県児湯郡木城町)にせまった。その後しばらく小ぜり合いが続き、家久は兄義久の援軍を得て、十一月十一・十二日大友島津両軍は高城川原(小丸川)に未曾有の大激戦を展開した。⁽⁸⁾ この時大友軍は大敗北をきし、大友氏にとってはこの敗北が後々まで尾を引き、かつて九州に膨大な勢力を誇っていた同氏も、次第に衰退していくのである。この戦いで勢いにのる島津軍は破竹の進軍をとげ、九州の各勢力を制圧していく。

この大友軍の日向敗戦を聞き、まず反旗をひるがえしたのが肥前の竜造寺隆信であった。これ以降かつて大友方に誼を通じた豊前・筑前・筑後の有力諸氏は、隆信方に付くことになった。かくして大友氏の勢力圏の内外において、秋月・野仲・筑紫・草野・蒲池氏などの有力諸將が離反していった。これも本拠豊後国以外での反乱はやむを得ないことであるが、国内に於いても離反者が出てきたことは、上下に非常な驚きを与えた。その一つが大友氏の一族で、国内最大の實力者である国東田原氏の総領田原親宏⁽⁹⁾・親貫親子の謀反である。以降田原氏の反乱を通して家臣達の動向を記し、森氏についても若干記してみたい。

三

日向の敗戦直後、天正六年十二月臼杵で開かれた重臣會議に、親宏は宗麟の許しを得ずして突然領国の国東に帰ってしまった。⁽¹⁰⁾そして、かつて所有していたが宗麟の妻の兄弟で田原の分家にあたる田原親賢(紹忍)に与えられていた、国東郷・安岐郷の返却を要求した。その結果この要求は認められて、一応の収まりをみた。⁽¹¹⁾その後彼は、天正七年九月十六日急死したが、引き続き養子の田原親貫また田北紹鉄の反乱⁽¹²⁾があり、大友氏はかつてない危機に陥った。

親宏の跡目を継いだ親貫は、同年十二月養父の遺志を継いで毛利輝元・秋月種実・田北紹鉄などと共に密約し、謀反を起した。彼は安岐城(現安岐町下原)を固め、一方一族の如法寺藤五郎親武らに命じて、豊前に対する備えという名目で鞍懸城を築き、⁽¹³⁾妻子共に在城を命じている。この城は豊前・豊後境にある宇佐郡佐野(現豊後高田市佐野)の切寄であり、⁽¹⁴⁾翌年の十月九日に落城している。⁽¹⁵⁾その前十月七日付で発せられた親家書状写によると、先非を悔い改め親家側の味方に参るものが、つまり寝返る者があることを記している。今後忠義を励み努力すれば、扶助をするというのである。かくして親宏・親貫側で働いていた片山越後守や同内記兵衛・田代出雲守また森惠一氏所蔵文書二十二号にもあるように、森伊賀入道などが親家側についた。⁽¹⁷⁾

つまりかつての田原親宏・親貫の家臣の中でも、津崎兵庫助鎮兼・同備前守父子あるいは溝部縫殿助・溝部右近允・萱島美濃入道鎮貞⁽²¹⁾・萱島源右衛門尉⁽²²⁾・森与三右衛門尉の如く、大友氏に心を寄せ親家側で参戦しているものもいた。

また津崎大和入道の如く、この時彼は隠居の身でありながら親家を助けている。円斎(宗麟)は彼の功勞に小袖を遺し、親貫叛逆以来の忠義を賞した。のち彼は、親家の加判衆に加えられている。彼らは宗麟の次子親家がこれを継ぐことを希望した。⁽²⁵⁾宗麟は天正八年正月頃親家に田原を名乗らせ、二月末国東郷に渡海入部している。⁽²⁴⁾親家は国東郷の雄度牟礼城(現国東町大字成仏)を根拠にし、宗麟・義統は自ら日出莊辻間村(現日出町)に出陣し、親貫討伐を指揮している。⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾

四

以上の様に、親宏・親貫の旧家臣でありながら親家側に付いた有力家臣として、萱島・森・溝部・津崎氏などがある。この内萱島・溝部氏は田原家の出で、一門家老である。⁽²⁹⁾しかし同じ溝部氏でも、溝部後藤左衛門の様に親貫方として、終始行動を共にした者もいた。⁽³⁰⁾

親貫の本拠鞍懸城への攻撃は、三月八日には始められたらしく、⁽³¹⁾九月には安岐城が落城し、鞍懸城も十月九日ついに落城した。この時親貫は落ちのび、宇佐郡方面に逃亡した。『大友家文書録』⁽³²⁾に依ると、善光寺村(現宇佐市)付近を逃亡中宇佐郡の武士時枝氏がこれを殺し、殘党七人も皆殺しにしたという。⁽³³⁾しかし文書録では、或説として鞍懸城が陥る時に共に自刃したともある。⁽³⁴⁾その時家来の溝部宮内少輔・萱島美作守・松城(木カ)一佐・森越中守等も戦死したともいう。しかし天正十三年壬八月廿三日の田原氏老臣連署副状写に萱島美作守・森越中守は出ており、落城の時に戦死をしていないことが分かる。十月十一日付の義統書状には、親貫を打ちもらしたので、その落ち行き先を突き止めて親賢と協力して打ち果たせと、宇佐郡の雄佐田彈正忠(鎮綱)に命じている。⁽³⁶⁾いずれにしろ主君は変わっても、それに仕える者にはそう大差はないらしい。前述の様に親家の入部の時からそれに協力した津崎氏・森氏(本家仁与住)などがおり、後で親家側についた片山氏や田代氏・森氏(別家安

宗住)などがいた。また最後まで主君と存亡を共にした如法寺氏などもいた。かつて親宏時代に、その重臣として活躍した詫磨・溝部・萱嶋・津崎・森氏などは、引き続き親家の重臣として活躍している。⁽³⁷⁾なおこの鞍懸城落城の時如法寺親武・親茂父子らは、城を脱出して筑前三笠郡入江の山中に隠れ、苗字を入江と改め秋月種実に使っている。これが後に杵築に住む入江氏の祖で、田原氏関係文書(入江文書・県指定有形文化財)はこうして同家に保管され今日に及んでいる。かくして我々は、今日この文書に依っていろいろのことを知り得ることは幸いである。

注(1) 『大分県史料』(四六三三・六三四)

(2) 同右六六一

(3) 当時大友家は、田原氏の協力を必要とする関係にあった。例えば大友氏泰と田原正盛が康永三年に確執を起した時、足利直義は「正盛自元無誤上者」(『大分県史料』(四六四二)といい、直義の田原氏に対する信頼の程が伺われる。また貞和五年の足利尊氏書状には、「早令同道氏泰、発向彼在所」(『大分県史料』(四七六)とあるのも、その一例であろう。

(4) 国東郷は、観応二年、足利尊氏から信濃入道行珍跡として、大友一族の田原貞広に勲功の賞として宛行なわれた(観応二年正月廿九日足利尊氏御判御下文案・『大分県史料』(四六三三)。^(三六九)以来当郷は、田原氏の本拠として相伝された。

(5) 田原氏が行なった領主化の一例として、応安二年に田原氏能は上田左衛門次郎に對して、「安岐郷内土貢十貫文」を充行っている(余頼文書三七号・『大分県史料』(四七四)。^(三七四)また応安七年の豊前城井陣での合戦に、氏能の士卒として森四郎なる者が出てくる。また永和三年八月十二日肥後白木原合戦の時軍忠を抽した若党の中に、太田七郎左衛門尉・帆足左近将監等があり、これら豊後清原一族の太田・帆足氏なども森氏と同様、田原氏に被官として臣従していた(『大分県史料』(四六五四)。^(三七三)彼らが、田原氏と結びつく直接の契機となるのは、前述の延文五年以降のことと思われる。田原氏能は九州北軍の中心として各地に転戦するが、応安六年玖珠の小田大和守以下の輩が謀叛を企てたので、十一月十三日高勝寺城に馳向かい、十七日敵を城内に追い籠め、郡内において連日野伏合戦をして忠節をばげんでいる(『大分県史料』(四六五三)。^(三七三)この様な時に、豊後清原一族の諸氏が田原氏に組し、以降行動を共にしたのではな

かろうか。田原氏がこれら諸氏に対し、どの様な型で土地を宛行っていたのか、被官化が進められたと思われる南北朝期の古文書が少ないので、判然としない。

(6) 『大分県史料』(10)六四六

(7) この森文書発見の経過については、それに携わった福川一徳氏が『玖珠郡史談』第五号にくわしく説明されているので、それを参照されたい。森氏は南北朝時代、すでに現在の安岐町瀬戸田に移住していたかどうかは分らない。このことについて、福川一徳氏は、「森氏の瀬戸田への移住は、大友氏による豊後の領国化が進み、田原氏が圧迫されて、本領のある国東郷へと撤退していく段階に行なわれたのであろう。(中略) おそらく、森氏の瀬戸田移住は、親幸代の応永前期ではないかと思われる」(『玖珠郡史談』(5)「国東郡安岐町森米男氏所蔵森系図と武蔵町森恵一氏所蔵森文書について」)と記している。

(8) 『増補訂正編年大友史料』第二十四卷一二九など、

(9) 天正七年耶蘇会士バードレ・フランチェスコ・カリオンのヤソ会総長あて年次書簡によれば、「あらゆる形でわれわれを恐怖の底へおとし入れ、恐ろしさの点では前のそれと変らぬものでありました。事の原因を作り出したのは前述申し上げました豊後の国の武將親宏でありました。彼は豊後の諸武將のなかでも最も大きな権力を有していました」といい、また「人々は皆、彼が間違ひなく豊後に叛乱を起したと考へ、王の力ではどうもこれに鎮めきれないだろうと思つた。それほどまでにこの男の勢力は大きく」(『大分県史料』(4)六四〇六五頁) などとあり、親宏の勢力と当時の混乱した状況が推測される。

(10) 十二月、不図臼杵の丹生島城から自分の居城に帰つたのは、表向きは「就豊前表火急之注進到来、急速出張」(『増補訂正編年大友史料』第二十四卷一五七) という理由からであった。これは十二月廿六日付の朽網宗歴等連署書状(『大分県史料』(10)七九四)に對しての返事として出されたものであろう。

(11) 『増補訂正編年大友史料』第二十四卷一五七・『大分県史料』(10)四三七・同(39)「大友家文書録」一六八六など。

(12) 親實と呼応した田北紹鉄は、敗走の途中日田郡五馬庄で討取られた。——『大分県史料』(39)「大友家文書録」一七四四・一七四五・一七五〇～一七六一など

(13) 『大分の歴史』(4)二三一頁では、「ひそかに、鞍懸城(豊後高田市)を築き、守備させた」(傍点は筆者)とあるが、大友氏の疑惑をまぬがれんがために、親宏は義統の了解を得て要害の修築を行っている(『大分県史料』(10)七〇五)。また同城は、約十ヶ月を要してその修理が完成している(『大分県史料』(10)六七〇)。名目はともあれ、実際は筑前の秋月種実や竜造寺隆信・中国の毛利輝元らの援軍を得やすくするためであった。

(14) 『豊後高田市誌』四二五～六頁・『日本城郭大系』(10)五四～五五頁

(15) 「佐田文書」(『熊本県史料』中世篇Ⅱ二八八)。渡辺澄夫氏はこの落城の日に関して、『大分の歴史』(4)二三八頁では「親貫の拠点である鞍懸城も、十月七日総攻撃をかけられて間もなく落城した。」といい、『増訂豊後大友氏の研究』二九一頁では「十月七日ようやく鞍懸城も落城して親貫も討伐された。」としている。しかし佐田文書二八八を見れば、十月九日に落城したことが分かる。また同二八六の十月八日付大友田舎書状には、「雖然鞍懸于今依相支、田原親家以出張可打崩之由申付候条」とあり、八日にはまだ落成していなかったことが分かる。また十一月十一日付大友義統書状には、「殊前ハ宇佐郡之内佐野切寄打崩之刻」(『大分県史料』(10)三二六)とあるこのことは、八日に城のある部分打崩されたりもしたが、完全な落城は、次の九日のことであろう。

(16) ここでいう森恵一氏の所蔵文書番号は、『玖珠郡史談』第五号で紹介した福川一徳氏作成の「森恵一氏所蔵文書目録」の整理番号である。森文書は同第七号において、筆者が全文を解説し史料紹介しているので、詳しくは同号を参照されたい。

(17) 『大分県史料』(10)五四六・五四七・五六四

(18) 同右(10)「大友家文書録」一七四二・一七四八・一七六二・一七七七・一七七三・一九一一・同右(10)四四三など

(19) 同右(10)三六〇・同(10)一一八

(20) 同右(10)三五七

(21) 同右(10)四三九～四四二・四四八・四四九

(22) 同右(10)四一一

(23) 森恵一氏所蔵文書十七・二十一号・

(24) 『大分県史料』(10)三〇三～三二一・三二九

(25) 『香下要文書』二月十二日付大友義統・円斎連署書状(『大分県史料』(8)八五)には、「然處家中之者、以順路之覚悟、一致申組、親貫並退、如法事一類之悪党、家督之儀、至親家申旨肝要之由、懇望之条、令領掌、入部之義申付候」とある。

また同日付大友円斎書状(「佐田文書」・『熊本県史料』中世篇Ⅱ二七二)でも、「然者宗龜一筋目為再興、家来之者申合懇望之条、家督之儀、至親家申与、一兩日中可為入部之条」とある。

(26) 二月十七日付大友義統書状(『増補訂正編年大友史料』第二十四卷四一・『大分県史料』(33)『大友家文書録』九二六)では、「田

(親貫)原右馬頭為退治、一勢差立候、然者、来廿日(諸勢可差寄力)令議定候之条」とある。しかし二月廿二日の円斎書状では、「一兩日中可為入部之条」とあり、最初の計画より少しおくれて、二十四日前後には海路国東に入った様である(「佐田文書」・『熊本県史料』中世篇Ⅱ)。

(27) 大友円斎が佐田氏に出した十月十一日付書状に、「毎事為可加下知、干今在村候」(『熊本県史料』中世篇Ⅱ・二八七)とあり、宗

麟は、田原親貫が籠る鞍懸城が落去して後もここに滞在し、戦後の残務処理を引き続き行っている。また辻間村での滞在の馳走を賞して地元の家族辻間若狭入道あてに書状を与え、「麟種」の法名を与えている(『増補訂正編年大友史料』第二十五卷二八六)。同二十五卷二七五等参照。

(28) 『大分県史料』(33)一七六五を見ると、玖珠郡衆の一人志津利治部少輔も今度の合戦に参加して軍勞があり、大友義統から感状を得ている。また三月十七日付大友義統書状では、辻間村在陣の辛勞を察し、鞍懸城への出陣につき田原親家と相談して、同日越山せしめられている。この命を奉じた人々の中に、平井兵部少輔や野上彈正忠らの玖珠郡衆の名もある(同(33)一九一八)。

(29) 『大分県史料』(10)所収津崎文書の朱書清成八十郎註・四六〇号萱嶋系図による。

(30) 親家側の右近允が、親家から去春入郷以来の奔走を賞され、安岐郷の内溝部後藤左工門跡参貫文・同郷成安藤九郎跡五貫文を扶助することを許されている(『大分県史料』(10)三五七)。

(31) 『大分県史料』(10)一五一

(32) 同右(3)七三頁

(33) 入江本田原系図の親宏の女子の条では、同じく時枝氏が親貫を討ったとある(『大分県史料』(10)四七三頁)。

(34) 入江本田原系図の如法寺親武の条では、親貫は鞍懸城で自刃したとある(同(10)四七四頁)

(35)・(37) 『大分県史料』(10)五五二

(36) 「佐田文書」(熊本県史料)中世篇Ⅱ二八八)。

(大分県玖珠郡九重町松木室)

大分県地方史料叢書(一)

豊後国村明細帳(九)

肥後領大分郡高田手永「高田風土記」ほか
海部・国東・速見郡の村明細帳五篇収録。
近世史研究必備の書。

(会員二五〇〇円、会員外三〇〇〇円送料共)

発行所 大分県地方史研究会

大分県地方史料叢書(三)

豊前国村明細帳(一)

豊前国六六八ヶ村の村名、村高、領主名を記した豊
前国高帳の他、宇佐郡下麻生村、宇佐村、元重組、
田口組、下毛郡今津組、宮園村、中摩村の村明細帳
など八編を収録。近世史研究必備の書。

(会員一八〇〇円、会員外二五〇〇円送料共)

発行所 大分県地方史研究会